

|         |                                     |
|---------|-------------------------------------|
| 氏名      | 竹内章人                                |
| 授与した学位  | 博士                                  |
| 専攻分野の名称 | 医学                                  |
| 学位授与番号  | 博甲第4877号                            |
| 学位授与の日付 | 平成25年12月31日                         |
| 学位授与の要件 | 医歯薬学総合研究科生体制御科学専攻<br>(学位規則第4条第1項該当) |

|        |   |
|--------|---|
| 学位論文題目 | Inhibitory Function and Working Memory in Attention Deficit/Hyperactivity Disorder and Pervasive Developmental Disorders: Does a Continuous Cognitive Gradient Explain ADHD and PDD Traits?<br>(注意欠陥多動性障害と広汎性発達障害の認知特性は連続的か?) |
|--------|---|

|        |                            |
|--------|----------------------------|
| 論文審査委員 | 教授 森島 恒雄 教授 内富 庸介 教授 野田 卓男 |
|--------|----------------------------|

#### 学位論文内容の要旨

注意欠陥／多動性障害(AD/HD)と広汎性発達障害(PDD)の関係性を明らかにするため、それらの神経心理学的特徴について検討した。対象は6～15歳の男児で、AD/HD群20例、AD/HD症状を伴うPDD(PDD+)群16例、AD/HDの特徴を持たないPDD(PDD-)群8例と定型発達群60例。言語性及び視空間性の記憶課題、Go/NoGo課題、color-word matching Stroop課題を行い、実行機能を評価した。言語性作業記憶の障害と個人内変動の増大はAD/HD症状と関連し、概念水準での干渉制御の障害はPDD症状と関連しており、それぞれの症状に特異的であった。反応抑制機能の障害はAD/HDとPDDに共通して認められた。PDD+群では、視空間作業記憶の結果を除けば、AD/HDとPDD-群の神経心理学的特徴を併せ持っており、AD/HDとPDDに連続性があるという考え方を部分的に支持する結果であった。

#### 論文審査結果の要旨

従来、国際的な診断基準では注意欠陥多動性障害(AD/HD)の診断の際、広汎性発達障害(PDD)は、除外基準とされてきた。しかし、両疾患の症状はオーバーラップしており、厳密に区別することは難しい。本研究は、両疾患の関係性を明らかにするため、神経心理学的特徴について検討したものである。AD/HD群とAD/HD症状を伴うPDD(PDD+)群、AD/HDの特徴を持たないPDD(PDD-)群および定型発達(コントロール)群の4群について言語性短期・作業記憶、視覚性短期・作業記憶、抑制機能評価の各課題を実施し、各群を比較した。結果は、反応抑制機能の障害はAD/HDとPDD+、PDD-群に共通して認められた。また、多くの点でPDD+群は、AD/HDとPDD-群と共通する神経心理学的特徴を併せ持っており、AD/HDとPDDに連続性があることを部分的に支持する興味深い結果であった。これらは、近年、注目を集めるこの領域において重要な臨床的知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。